ナイスの視線で、日常の楽しみをお届けする、西成発の地域情報誌 2022

Take free!

なび

7月号
vol. 185

「物思いの背中」
長橋2丁目付近にて撮影

特集 おとなの社会科

第8講 歴史 ── 北津守

おとなの社会科

第8講 歴史 ── 北津守

昔、使った教科書をパラパラめくってみると、あの頃には気づけなかった面白さがみえてきた──そんな経験はないだろうか。学校の教科書は昔と同じではない。だから、大人になってからの学び直しも決してムダではないはず。学校に通ってた頃を思い出して、もう一度、目の前に広がる社会を学び直してみませんか。

錆びた線路

北津守にある南海汐見橋線の木津川駅構内に、放置されたままの錆びた線路がある(①)。今は切断されて途切れているが、かつてはこの奥にあった貨物ヤードに繋がっていて、木材を積んだ貨物列車が頻繁に出入りしていた。

汐見橋線の前身となる高野鉄道が発足したのは1894(明治27)年。奈良県の吉野や和歌山県の高野山一帯は古くから林業の盛んな土地だったが、大阪への木材の運搬は、船で紀ノ川と大阪湾を経由する大回りの行程を強いられていた。高野鉄道は、そうした不便な輸送路の改善と近代化のため、高野山と大阪を短距離で結ぶ路線を計画した。

先行して1898(明治31)年に大小路(現・堺東)―狭山(現・大阪狭山市)間を開業させると、1900(明治33)年に道頓堀(現・汐見橋)まで乗り入れる。木津川駅は名前の通り木津川に面して置かれ、併設された貨物ヤードが陸運と水運の結節点となった(②)。

その後、南に路線を伸ばし、1915(大正4)年には紀見峠を越えて高野山麓の橋本まで開通。南海鉄道に合併されたのは1922(大正11)年のことである。

木津川駅構内。往時の賑わいが嘘のようにひっそりとしていた

貯木場盛衰記

木津という地名は「木の港」を意味する。西暦593年、聖徳太子が四天王寺を造立するにあたり、全国から大阪に木材を集めた。その際に、現在の木津川近辺が陸揚げ港として使われたという。古来、木材とは縁の深い土地だったのである。

1918(大正7)年、西区の立売堀(いたちぼり)にあった貯木場が大正区に移転する(③)。一帯には木材を扱う問屋や加工業者が軒を連ねた。その数500~600軒、遠く満州や朝鮮にも商圏を広げていた。

木津川を挟んで貯木場と至近距離にあった北津守は、木材の積み下ろし拠点として発展する。橋本駅から貨車で輸送された木材は、貨物ヤードで渡船に積み替えられ、木津川と大正運河を通って貯木場へと運ばれた。

昭和に入ると市街地化が進み、北津守の人口は急増。川沿いに軍需工場が集まり、木津川駅の貨物取扱量はさらに増加する。この頃、貯木場も最盛期を迎えた。

1957(昭和27)年、南港の平林に新しい貯木場が完成し、徐々に移転が進んだ。また、物流の主役がトラックに移ったこと

1968(昭和43)年の貨物ヤード。奥には木材の山が見える

在りし日の貯木場。最盛期には、総面積は66ヘクタール以上にもなった

や、輸入木材の台頭なども重なり、南海の貨物輸送は急速に衰退。平林貯木場への全ての移転が完了した1971(昭和46)年、北津守の貨物ヤードもその使命を終えたのだった。

変わりゆく街

6月の北津守を訪れたのは、貨物ヤード跡と、かつてその隣にあった煉瓦工場の跡を見るためだった。ここで造られた煉瓦は、紀淡海峡の友ヶ島まで運ばれ、砲台に使われたという。

和歌山県の加太と淡路島の間にある紀淡海峡は、黒船来航の頃から大阪湾を守る国防の要衝となった。明治に入ると、加太から友ヶ島、淡路島の由良にかけて陸軍の砲台群が設置され、一帯は由良要塞と呼ばれた。

友ヶ島では、1890(明治23)年から1904(明治37)年の間に5つの砲台が置かれた。一般人の上陸は禁じられ、600人の兵士が駐屯し警備にあたった。しかし、戦争の主役は次第に戦艦から航空機に移り、砲台は一度も使われずに終戦を迎える。

工事中の貨物ヤード跡。この広い空も、もうすぐ見納めとなる

北津守は軍需工場が多かったためか、1945(昭和20)年3月の大阪大空襲で全焼に近い被害を受けた。煉瓦工場もこの時に焼失した可能性が高い。跡地は物流倉庫になっており、周囲を歩いても当時の痕跡は見つからなかった。

貨物ヤード跡に行くと、広大な空き地に何台もの重機が忙しく動き回っていた(④)。近くにいた工事関係者に尋ねると、食品関係の工場が建つのだという。掘ると貨物駅時代の遺構が出てくるので、撤去のため工期は遅れている。それでも年内には完成するらしい。

雨降る街で、過去は静かに消えようとしている。諸行無常という言葉が頭の中を巡り、しばしその場に立ち尽くした。

潮騒の中で

梅雨空の街を離れて、南へと向かう。和歌山市駅から古い2両編成の電車に揺られ、30分ほどで終点の加太に着いた。港まで歩き、フェリーに乗り継いでさらに20分。友ヶ島の桟橋に降り立つと、湿っぽい潮風の中に、微かに夏の匂いがした。

険しい山道を、砲台跡を訪ねて歩いた。由良要塞は戦後間もなくGHQの命令で爆破されたが、友ヶ島の砲台群は比較的良い状態で残っている(⑤)。それでも、

友ヶ島第2砲台跡。保存状態は良いが、所々に爆破の跡があった

崩壊が進み立入禁止になっている場所もあった。北津守からここまでおよそ60キロ。砲台の建設時、大阪と和歌山の間に鉄道はなかった。煉瓦は木津川から船で運ばれたのだろう。

展望台から紀淡海峡を望む。中央に見えるのは1872(明治5)年竣工の友ヶ島灯台

古来、友ヶ島は修験道の聖地だった。開祖である役小角がこの地に行場を開いたのは、西暦650年頃。以来、長きにわたって祈りと修行の場だった島の静寂は、近代の砲声によって破られた。日清戦争の数年後に砲台の建設が始まり、全てが竣工した年に、今度は日露戦争が始まる。それから何年もの間、長い、長い、戦争の時代が続いた。

島の中央にある山の頂上が展望台になっていた。紀淡海峡を船が行き交い、その向こうに対岸の淡路島が見える(⑥)。海峡の西側は由良瀬戸と呼ばれ、重要航路が集中する要衝となっている。大日本紡績で作られた綿糸を載せた船も、藤永田造船所で造られた駆逐艦も、この瀬戸を通って外洋に出て行ったはずである。

振り返ると小さく加太の街が見え、その背後に紀伊山地の山並みが広がっていた。吉野や高野山では、林業は主要な産業として今もその伝統を守っている。しかし、もう北津守に向けて貨物列車が走り出すことはない。目を閉じると、100年が一瞬のうちに過ぎ去ったように感じた。

本連載の津守編では、津守、南津守、そして今回の北津守と、木津川沿いに落ちている記憶の痕跡を辿る旅を続けてきた。淀んだ川面を見つめながら過去と現在を幾度も行き来し、ここ友ヶ島の山頂が、図らずも旅の終着点となった。

海峡には、木津川から大阪湾に注いだあらゆる音が海流に乗って流れ着き、潮騒の中で溶け合っている。夜の貨物ヤードを出て行く機関車の警笛や、造船所から送り出される大型船の汽笛。春風にそよぐ千本松のざわめきから、真夏のリバーサイドプールにあがる歓声まで。きっと、全ての出来事はどこかで繋がっているのだろう。全ての川が、海を介して繋がっているように。

この海域には室町時代の貿易船が沈んでおり、今も積荷の陶磁器などが引き揚げられるらしい。山中での厳しい修行が修験道の祈りであるように、陶磁器と共に海の底に沈んでいる小さな歴史もまた、時代の荒波の中を懸命に生きた人々の、切なる祈りの形なのだ。

そして、時を超えて彼らがこちらに語り掛ける声を聞くたびに、微かな呟きに耳を澄ますそのたびに、心は再び記憶の海を漂い始めるのである。

文責：福井龍磨・若松司

にしなりもん

西成にもまだまだ発掘されていない文化資源・社会資源は存在するはず。これら西成産のモノやコトを「にしなりもん」と名づけ、その由来やエピソードを辿っていきます。

旬のお惣菜が楽しめる「居酒屋　丸紅酒店」

今年も暑い季節がやってきた。私は冬より夏の方が圧倒的に好きだ。しかし、夏が好きと言っても暑いものは暑い。こんなときはビールで喉を潤さなくてはならない、と今日の星座占いで言っていた気がする。

ビールを求めて、私がふらふらと夜光虫のように引き寄せられたお店「居酒屋　丸紅酒店」をご紹介しよう。

店内に入るとまず目に入ってきたのは、カウンターに〝ドン！〟と並べられたお惣菜の数々。旬の食材を使ったこれらのお惣菜たちに「オレたちを食べながらビールを飲んでよ！」と誘われている気がしてくる。たけのこの煮物や厚揚げとこんにゃくと竹輪の煮つけ、ウインナー、土手煮など種類の豊富さがお店の個性を表していて、面白い。今日はお腹も空いていたので「ここからここまでください」とハリウッド俳優のような注文の仕方をしていた。

そしてビールである。「ビールはアサヒとキリンあるけどどっちする？」と店主の村上さんが聞いてくれた。細かいようだが、アサヒとキリン、銘柄を選べる店は最高だ。気分によって変えられるのが嬉しい。どちらも好きだが、今日は「キリンさんの方がもっと好きです」な気分なので、キリンをいただいた。待ちかねていたビールが運ばれてくると、すぐさまコップに注いでグイっと一飲み。うますぎる。

注文していたお惣菜も運ばれてきた。厚揚げとこんにゃくと竹輪の煮つけは良く味が浸みていて旨い。たけのこの煮物はシャキシャキとした食感が楽しく、程よい味付けでビールがぐいぐい進んでしまう。皮ごと茹でた新じゃがは熱々のホクホクがたまらない。そして土手煮である。濃いめの味付けに七味唐辛子を少々ふりかけると、口に入れる前から間違いなく旨いのがわかる。これらお惣菜の他にも刺身や焼き鳥に串カツなど、定番の居酒屋メニューが揃っている。

丸紅酒店は創業58年目を迎える昔ながらのお店である。開業当初は立ち飲み屋で、ジュークボックスが置いてあったらしい。今はカラオケ機に変わってしまったが、音響設備の評判は抜群なようだ。

もうひとつ気になったのが、カウンターに積まれていたお弁当だ。1つ500円というお値打ち価格。なんと来店が難しい人には配達もしているようだ。配達料無料というのだから、なんとも人に優しいサービスである。

またお気に入りの店が1つ増えた。村上さんに「気つけて帰りやー」と見送られ外に出るとすっかり涼しくなっていたが、満足感で心はぽかぽかだった。

文責：山村裕太

居酒屋　丸紅酒店
住所：大阪市西成区山王1の12の9
電話番号：06-6631-2441
営業時間：午後3～11時
定休日：火曜日

[沖田一志]Win10には遠隔操作機能が標準で組み込まれていたので頻繁に活用してました。しかし、マイクロソフトの仕様変更で簡単には使えない機能になった。迷惑な仕様変更は止めて欲しい。

[田岡秀朋]記念すべき500回目の楽塾は、6月の大柳生農業実習。2008年から15年目。多士済々の塾生・ゲストの顔が懐かしい。懐古主義とは無縁の佐々木塾長は健在。土曜の夕方はぜひ楽塾に!!

[谷口円]修学旅行中の中学生がアート作品を破壊したというニュース。作者のクワクボリョウタさんが出したコメントが温かくて素敵だった。昔鑑賞した彼の作品も、本当に記憶に残る素敵な作品だった。

些事争論

些事でも何でも気になったらあれこれ考えてみよう。いいこと思いつくかもしれないし。気づいたら西成にたどり着いていた、或るオタクのてっちり系コラム。

都市を考える①
『人口密度で一喜一憂？』

恒例となった感もあるが、先日も新聞紙上で国内の出生数が81万人に減ったと大きく報道された。団塊世代の出生数が２６０万人台、団塊ジュニア世代は２１０万人だったので、約３分の１まで減っていることになる。小中学校の教室が余ってくるのは必然である。

団塊ジュニア世代が生まれる高度成長期の真っただ中で幼少期を過ごした筆者にとって、人口や児童数は増えるのが当たり前であった。高度成長期が終わって安定期に入り過疎化が進行しても、都市部や日本のトータルな人口は増加していた。大阪府においても大阪市の人口や工場などがどんどん郊外に出て人口減少は明らかだったが、郊外の成長があったので、人口の将来に不安を抱くことはなかった。

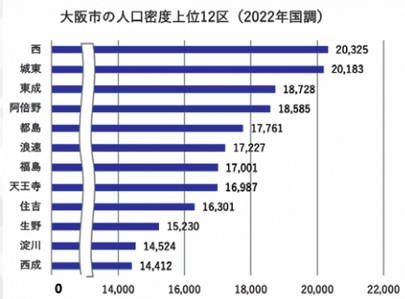
１・２億人の日本の総人口が減少し始めた今、考えればならないことは、その適正人口と年齢別人口のバランスである。これらはインフラ利用におけるバランスやセーフティネットの効果的発動に大きな影響を与えるので、日本の将来の在り方を左右する。地元の西成区をみると、この影響ははるかに重大である。ピーク時の１９６０年代に21万人だった人口は２０２０年に10・６万人と半減。市内24区では最も人口の減少が激しく高齢化率も36％となり、年齢別人口バランスが極めて偏っている。適正人口を考える素材として西成区はまさに打ってつけだろう。

この課題を考えるに最も簡便な数値は人口密度でないかとにらんでいる。人口集中地区（ＤＩＤ：Densely Inhabited District）の基準が参考になるだろう。４千人／㎢以上の地区をさす。百ｍ四方を中学校の運動場と捉えてみると、そこに40人、４人世帯なら10戸ほどの家が建っている感じである。ゆとりのある市街地でひょっとしたら若干の農地もあるかもしれない。因みに、基準を超える人口密度を持つ地区は「都市的市街地」とみなされ、住所表記も旧来の番地地名から○丁目△番×号の住居表示地名に変わる。

現在の西成区の人口密度は１・４万人強である（図参照）。研究では２万人／㎢以上で「密集市街地」に見なされるようである。大阪市では西区と城東区がようやくそのラインに達している。大公園や河川および河川敷、オフィス街などの非住地を差し引くと、１・５万人／㎢以上の区は密集市街地と捉えられる。４万人／㎢という現在の２倍の人口密度を有していたかつての西成区は堂々たる密集市街地であった。近年タワーマンションが林立する西区は、今や大阪市内で最も多い２万人／㎢と密集市街地の域に入っており、タワマンの威力を思い知る。

顧みれば１９７０年代のあいりん地域（０・62㎢）の人口は３万人を超えていた。人口密度に換算すると約６万人。奇をてらった表現をすれば、あいりん地域は比較的低層の簡易宿所などに抱え込んだこの人口密度で食ってきたのである。では、こうした地域は今後どうやって食っていけばいいのか。そのためにはいろんなシナリオを用意しなければならないが、その話は次回以降に。乞うご期待。

ハンプティ・T



[安田拓也] 演奏活動60周年記念の前橋汀子さんのバイオリン演奏に息を呑む。幼少から何か一筋に生きるということは想像に難い。楽譜に忠実なこの世界の音楽から何を受取れただろうか。

[福井龍磨] 本誌の取材で友ヶ島へ。フェリーを待つ間、加太港の周辺を歩いた。時が止まったような路地を抜け、砂浜に出る。季節外れの海水浴場に人の姿はない。しかし確実に、夏は近づいている。

melody of Smiles

堺市立ビッグバンに親子遠足に行きました♪ トリックアートのワニタン階段、大きなマメの木や野菜の形をしたクッションの遊具、夢あふれるおもちゃの体験など、魅力的な遊びがいっぱい。親子で一日楽しみました☆

GCC Kids International School

たくやの ろくじょうふたま 畳間

ハナレバナレになった人とまち。
くらしの窓から、紡ぐヒントを探してみる。

アワイチの〝あお〟

先日、約10年振りに自転車で淡路島を訪れ、初の〝アワイチ（淡路島一周）〟を遂げた。島自体は１３０㎞ほどだが、大阪からだと往復で約２３０㎞。今回は２日間に分けて、初日は西海岸の80㎞地点にあるゲストハウスで一泊。２日目に残り１５０㎞を完走。

淡路島は見所が多い。１８７１年に建てられた「江崎灯台」、１８００年前の塩作りの遺物が発掘された「貴船神社遺跡」、廃校をリノベーションした「のじまスコーラ」。淡路瓦のまち、津井にある「産業文化センター」では、瓦作品達が出迎えてくれた。道の駅「うずしお」の玉ねぎバーガーで小腹を満たし、人形浄瑠璃の「淡路人形座」がある福良のまちには、開演の時を告げる太鼓の音が響く。

お気に入りの景色は、水田と日本家屋の向こうに見える青。広大に広がる青も良いが、無骨なコンクリの隙間に描かれた青も捨てがたい。船乗りの背中越しの港の青も、新緑の蒼とのコントラストも島国らしくて。シャッターを切ったのは約４００回。足とスマホがパンパン。

（安田拓也）

自然と生きる風景

[西原夏美] ふと、ずっとやっているオンラインゲーム、今年で何年目なんだろうと調べたら、なんやかんやで3年くらいは経っていて、よくやってんなぁと自分で感心してました笑

[西田吉志]100年以上前に執筆された島崎藤村の長編小説『破戒』が、全国水平社100年を記念して、7月8日より全国の映画館で公開される。大阪では梅田ブルク７で上映されるので、ぜひ観てほしい。

葉っぱの吐見（といき）

私は草木が大好きです。とくに観葉植物には心癒されます。私と葉っぱとのお喋りを聞いてください。

「青紅葉の葉っぱ」の巻

なまえを聞いておどろいた？
これはわたしの本名です。
かたちが似てるわけじゃない。
生まれたときからこの姿。
色気がなくてもほっといて。
食い気はだれにも負けないわ。
イライラしているわけじゃない。
ツンツンしているわけじゃない。
真のわたしを見てほしいだけ。
無のわたしを感じでほしいだけ。
だれがどういったって、どう思われたって気にしない。
でも、でもね
みんなわかってくれている。
そして紅葉にバトンをわたす。
それまでわたしは咲きつづく。

赤井まゆみ

青紅葉のこと

カエデ科の落葉高木。緑の若いカエデのことをいう。花言葉は「美しい変化」「遠慮」「謙虚」

皮算用 胸算用

にしなり隣保館の館長が日々の出来事について胸のうちで皮算用していることを語っていくよ。

今年は、部落解放同盟中央本部も大阪府連も西成支部も役員選挙の年である。水平社100年を迎えて、改めて運動の現状や社会状況、今ある課題などを合わせて検討し、運動の方向を指し示す大事な年になる。

行政や他の連携組織との関係もあって、全国の組織が抱える運動の状況も課題も簡単に解決するものではないことは容易に分かる。同和対策特別措置法が失効して20年が経過した今、部落差別撤廃に向けた一般施策の創造や活用が十分にうまくいっているとは言い難い。だが、こうした状況下でも、地域に暮らす方々から受け取ったご意見やご相談を糧に、まちづくりや地域福祉活動を前進させる、しっかりとした役員体制を組まなければならない。

（寺本良弘）

小湯かげん

冨田一幸

水平社一〇〇年の時空を超えて④ 大崎皮革の大争議

さて、今号は、これまで歴史に埋もれてしまっていた西浜最大の大崎皮革争議のミニドキュメントです。

1934年1月14日、浪速区栄町4丁目第2共同工場20号の大崎皮革工場（従業員19名）で、漉師（すきし）（※）前田政吉の解雇事案が発生しました。西浜の漉師の親睦団体・愛和会の反応は早く、大阪皮革労組の協力を得て、21日には会社との交渉に出向きました。ところが、興奮した工場主が焼きゴテで交渉団の成川義男の前額部を殴りつけ、成川が近くの大野病院にかつぎ込まれる騒ぎになりました。

漉師らは一糸乱れず、翌朝には22工場90名の一斉にストライキに突入します。直ちに、谷本政太郎を団長に、行動隊、糧食隊、対策委員、交渉委員、伝令からなる争議団を結成しました。北井正一、椿繁夫ら総連盟、大阪皮革労組も組織を挙げた支援態勢を構えました。

争議団は翌23日夜、①前田政吉の復職、②健康保険加入、③解雇手当・退職手当の制定、④閉散期の生活保障、⑤便所・脱衣所・食堂の設置、⑥職工雇入に対しては愛和会に相談する事など、9項目要求を提出。23日夜、真相報告発表演説会を開催（500名参加）、24日には支援の糧食米を搬（はこ）ぶにあたっての米挽きデモを実施、西浜は騒然となりました。西浜の町内会からも醤油、味噌、炭など寄付が次々に寄せられました。

仲買人原藤七（吉岡弥市夫人の父親）らが調停に入ったものの物別れに終わり、争議は月を越して長期化。愛和会は結束の乱れを警戒して、東成区森小路の全国農民組合本部に一時籠城して闘い続けました。

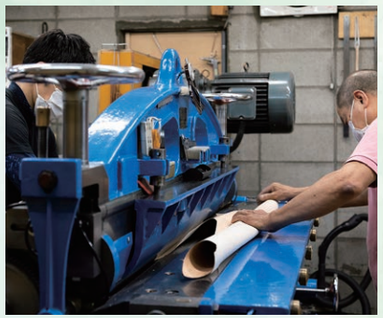
一方、経営側の同業組合は、争議の長期化で作業が停止しまったため、和歌山に皮を運び込んで漉作業をなんとか再開しようとしましたが、和歌山の漉師たちは愛和会に同情して作業を拒否。困った同業組合も大崎皮革の説得に乗り出しました。

その間、大阪皮革労組と水平社大阪府連は未組織工場に働きかけ、次々と組織を拡大していきました。ついに、前代未聞の「西浜皮革ゼネスト」に突入せんと、2月22日、22の皮革工場、13の製靴工場の工場代表者会議を招集しました。会議場には続々と工場代表者が詰めかけましたが、そこに、「この会議は左翼の会合の疑いあり」との理由で乱入した大阪府特高課と芦原署特高係が、17名の活動家を検束してしまい、「ゼネスト」は中断します。

しかし争議団は屈せず、5月に再交渉の場が整います。が、情報源の『社会運動通信』の記事はここでストップ。最期の顛末は、残念ながら不明のままです。前回で書いたように、翌34年には皮革労組は朝鮮人労組との統一を成して存続していますから、勝利的決着を見たと推測します。そして、この争議から凡そ3年後の1937年、松田喜一は西浜の皮革業者を集めて経済更生会を結成、さらに1941年には靴修理業者3000人からなる大阪靴更生組合を結成するのです。

時空を戻して一〇〇年後のいま、現代の識者の中には、松田のこうした活動を見て、皮革争議とは趣を異にし、融和事業に転じたと評する方もいます。ボクは、皮革労組から靴修理業者組合へと、戦時下にあって連綿と続く皮革産業を巡る「資本主義vs西浜部落」の「陣地戦」だったと思っていますが、ちょっと難しいので、連載を読み進めていただきながら、一緒に考えていきましょう。

※漉師…厚みを調整するために革素材を水平に分割する「漉割（すきわり）」作業に従事する職人のこと。



漉割の作業所はこの界隈でも2軒だけに。

[若松司] 地元の職人さんにお話をうかがった。余人をもっては代えがたい技を身に付けながら驕りはなく颯爽とした佇まい。こういう職人の生き様って「時代の賜物」なんだろうか。

[山村裕太]LINEのスタンプを「ちいかわ」しか使っていないことに気づきました。「ちいかわ」を知らない人は調べてみてください。かわいいけどあの世界観がなんとも言えません。

地域の縁を心でつなぐ

松向寺さんの心の時間

突然の病で夫が亡くなり、妻が喪主になりました。「夫婦が添い遂げる」とは「残された一方が喪主になる」ということでもあります。誰もが、この厳しい現実を受け入れ、乗り越えられる「強い人」なのではありません。「逃げるが勝ち」という諺にあるように、「時には逃げるほうが得策」ということを伝えたくて、涙に暮れるご婦人に「向き合うことが辛かったら、逃げてもいいんですよ」と声をかけました。

およそ6万年前、アフリカで誕生した人類がその誕生の地から世界中へ拡散していったことを「グレート・ジャーニー」と呼ぶそうです。このルートを辿った関野吉晴さんによると、グレート・ジャーニーとは土地を追い出された「弱い人たち」の旅です。私たちの祖先は冒険心に富んだ「強い人」ではなかった。土地を追い出された「弱い人」が、旅の過程で知恵を身につけ、過酷な環境を乗り越えながら新天地へ向かったのです。

このご婦人も「逃げる」が「向かう」に変わったとき、新しい人生が始まるのでしょう。

松向寺　通法

ココドコ

ここはドコ？
わたしはダ～レ？
編集部が厳選した
「にしなり100景」
大公開！

とあるバス停です。壁に描かれた絵、空、バス停の屋根の色がリンクして、ちょっと不思議な雰囲気に。ココがドコだかわかった人は、ゆ～とあいの受付まで！正解者にはドリンク無料チケットをプレゼントいたします（先着10名様限り）。回答期限は7月末日、ふるってご回答ください！

2022年6月撮影

［先月号の答え］ 長橋3丁目9-23の大阪市立鶴見橋中学校でした！鶴見橋周辺は、あちこちに鶴のモチーフが使われていますね。

ゆ～とあい

にしなり隣保館

にしなり隣保館「スマイル ゆ～とあい」は、地域コミュニティ全体が抱える課題の解決をめざす民設民営の福祉施設です。日々悩んでおられる困りごとはありませんか？お悩み解決のためにできることをいっしょに探しましょう。

なび 7月号（vol.185）
発行日：2022年7月1日（創刊日：2007年1月1日）
発行：株式会社ナイス
住所：大阪市西成区長橋 3-6-33
電話：06-6563-1150
E-mail:info@nice.ne.jp
url:https://www.nice.ne.jp/

編集長：若松司
編集：沖田一志、田岡秀朋、西田吉志、西原夏美、福井龍磨、安田拓也、山村裕太（あいうえお順）
イラスト：hidarimaki　デザイン：谷口円

（株）ナイス
ホームページ